九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Insulin-like growth factor Ⅱmessenger RNA-binding protein-3 is an indicator of malignant phyllodes tumor of the breast

瀧澤, 克実

https://doi.org/10.15017/1928638

出版情報：Kyushu University, 2017, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：© 2016 Elsevier Inc. All rights reserved.

（別紙様式２）

氏　　名	瀧澤　克実
論　文　名	Insulin-like growth factor Ⅱ messenger RNA-binding protein-3 is an indicator of malignant phyllodes tumor of the breast
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　橋爪　　誠 副　査　　九州大学　　教授　　中島　康晴 副　査　　九州大学　　教授　　前原　喜彦

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本研究の目的は乳腺葉状腫瘍(phyllodes tumor, PT)におけるIMP3(insulin-like growth factor II mRNA-binding protein-3)とEGFR(epidermal growth factor receptor)発現の臨床病理学的意義および予後との関連を解明することにある。130例の原発性PTs(良性83例、境界悪性29例、悪性19例)、34例の再発性もしくは転移性PTs、26例の線維腺腫症例でIMP3およびEGFRの免疫染色を行った。原発症例において、IMP3は線維腺腫 (0/26, 0%), 良性PTs (0/83, 0%) および境界悪性PTs (3/28, 11%)に比べ悪性PTs(17/19, 89%)において高発現していた。また悪性PTsの再発および転移例にも高発現を認めた(それぞれ3/5 [60%]、6/6 [100%])。IMP3発現の局在に関して、ほとんどの悪性PTsでは導管と導管の間あるいはより広くびまん性に高発現しているのに対し、線維腺腫や良性PTでは導管周囲の間質に限局して弱い発現(低発現)を認めた。EGFR過剰発現は腫瘍の悪性度およびIMP3高発現とよく相関した。また、IMP3および EGFR過剰発現は無転移生存期間および無病生存期間の短縮ともよく相関した。今回の結果は、特徴的な染色発現パターンを伴うIMP3およびEGFRの高発現が悪性PTの診断に有用であり予後不良因子にもなり得ることを示唆している。

以上の結果は本分野における新しい知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、研究結果などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容およびこれに関連した事項について種々の質問を行ったが、それに対し、いずれも適切な回答を得た。

よって、調査委員合議の結果、試験は合格と判定した。